三河アララギ

２０２５年 令和７年１月 睦月（むつき）

新　年　号

第 七十二 巻　　第 一 号

ニューヨーク日記（219）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

CHRISTMAS TREE LIGHTS

Blue Shoe Diaries

クリスマスツリーの飾り付けやライトの配置には、意外とこだわりがあることに気付きました。今年は自分で全部やってみた結果、大満足です！ライトが均等に配置されていて、全体がしっかり明るいのが好きですが、それ以上に、片付けるときに絡まないよう簡単に取り外せるのが重要！ツリーを片付ける1月にならないと結果はわからないけど、うまくいった気がするぞ！あと余ったライトで作ったツリートップの星が、今年のアート・バーゼルに飾られていてもおかしくないほどの仕上がりになりました！なんてね。

This year, I realized I'm surprisingly picky about how to decorate a Christmas tree—particularly when it comes to stringing the lights. So, I rolled up my sleeves and took the task into my own hands. The result? A tree I can truly call my own! I love a tree that's evenly lit and well-balanced, but more importantly, one where taking the lights down won't feel like a wrestling match. We'll find out in January if I succeeded, but for now, I'm basking in the glow of a job well done. Plus, the pièce de résistance is my DIY treetop star made from extra lights—it's so bold, it could have debuted at Art Basel!

目次

第七十二巻第一号（通巻八五三号）

表紙・全員集合（1）
ニューヨーク日記(219)　Blue Shoe（2）
歌集　わが冬葵　御津　磯夫（4）
歌集「草々」　今泉　米子（5）
はははきくさⅢ　大須賀寿恵（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　夏目　勝弘（7）
『歌集　八千代』　岡本八千代（8）
ヌートリア　弓谷　久子（10）
おとなしく　今泉　由利（12）
ハローウィン　安藤　和代（14）
金せん花　山口千惠子（16）
メタセコイア　杉浦恵美子（18）
真と偽　伊藤　忠男（20）
庭中改修（その十）　白井　信昭（22）
「朝のリレー」　矢崎　直人（24）
『ことよせ』　いーはとぶ
牧原　規惠（26）
稲吉　友江（26）
鈴木美耶子（27）
牧原　正枝（27）
森　厚子（28）
水野　絹子（28）
大武　智子（29）
現代学生百人一首　東洋大学
小塚　萌愛（30）
高橋　永尚（30）
井上　璃音（30）
松橋　明句（30）
樋口壱之介（31）
宇佐見　翔（31）
北湯口莉奈（31）
岡本　春紀（31）
植村　公女（32）
木村　歩歩（32）
今泉　如雲（32）
矢崎　直人（33）
今泉　由利（33）
川口カルチャー受講者自作自詠俳句集（34）
折々の詩（十一）　ふじのけんじ（36）
五感を澄ませば（31）　杉浦恵美子（38）
附録（三十一）　矢崎　直人（40）
『喜寿　＋　一年』　中屋　保之（42）
『酔いの徒然』（153）　丸山酔宵子（44）
「バンビのビンバ」　高橋　育郎（46）
絹の話（170）　今泉　雅勝（48）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（50）
初狩便り38　花野みぷり（52）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（54）
康鍼治療院　玄　翁（56）
『乙巳元旦に作有り』　殿山　木風（58）
編集室だより　今泉　由利（60）
「三河アララギ」について（62）

『俳句』

歌集　わが冬葵

御津磯夫

鳶二羽のむつみあふこゑ爭ふこゑ春の彼岸の朝ぞら仰ぐ

松の間の古りて變らぬ一つ部屋に慕ひ來し人と晝のもの食ふ

始めての逢ひもたのしく一方にそねみねたまれしことも言ひ合ふ

わが病みて三とせ來ざりし引馬野碑枯れ萩凌ぎ友を導く

抽齋をまた心してよみなづむ曇りさむざむし雨蛙鳴く

根岸にて狂人をわれに說きましき形外先生はここに百年

虹彩がレンズに變りゆく過程を癌發生の機序に加へむ

腰をまげて苗籠負ふはわが患者早苗の餘りを負ひて捨てにゆく

脊のびして爪だちをして望み見る野も山も空も木も無くなりぬ

軒下に二人静（ふたりしづか）の花すぎてはやくも萎えゆく雨ののちにも

歌集「草々」

今泉米子

幼かりし記憶もかへれ庭のみちに丹椿落つるさまも聞かせむ

ネッカチーフは水玉がよし記憶まだ返らぬ吾が子の伸びたつ髪に

あるがままに我ら過ぎつつわが庭の蘖の藤の今日の花房

二見の道岐れ來し古の姫街道竹藪の中に消ゆるばかりを

藤蔓に髪亂れつつ姫街道の阯といふをゆく阿佛尼のゆきき

U字型の側溝工事に掘り出だす赤土の中の天平の甍

握り飯のあとに包むは天平の簷瓦らしき厚き一塊

拓かるる赤土にまじる瓦の缺け木型に押ししか早蕨文は

女學校の理科の時間にベルツ水つくりき知らざりきベルツ博士を

西明寺は山の青葉に小諳くて廢れし宿堂の電子オルガン

はゝきくさⅢ

大須賀寿恵

つゆくさのつゆの乾きし刻に起きてしばしらく縁に坐りてをりぬ

うすばかげろう生命惜しみて地に這へる蜜柑の葉裏にとけゆくごとし

どちらでもよしと非情に電話きりぬそれより動悸の亢まりやまず

いつまでも鳴き続ける土蛙秋海棠の朱きにすがりて

掌にのせて重みを感する程ゼノールのばし痛む背に貼る

ゼノールを貼りたる後を坐りをり背骨の痛み指に伝ひ来る

背の骨のふくらみに貼りしゼノールは一夜吾が部屋に臭ひつづくる

子と倚りて一つのリンゴむきて食ふ未だ青くしてかたしと云ひつつ

ひと畝の紫蘇の葉は色あせ摘まぬ間に夏の休みは終となりぬ

九月一日今日より書かむたどきなく悩むスモンのわが歌日記

三河アララギ歌集Ⅴ

夏目勝弘

定期券を収めたる尻のポケットを手に確かめて雨の中に出づ

歯に罹る小さきを取らむその事に悔しき事も忘れてゐたり

太陽の下を一日歩みたり幾年ぶりかと思ひなどして

土を被る竹の子掘りて幾日ぞ今朝は枝の出でたる竹の子を折る

竹の子は早くも枝を出だしをり枝にも小さき竹の皮付けて

筆談もて貯金勧奨することも我の仕事と思へば淋し

よろしくお願ひしますと日に幾度いはねばならぬ仕事の続く

定年の早く来ぬかと思ふあり子規の生涯知りたる時より

我が性を偽りながら勤むるもあと十三年となりてきにけり

朝出でて夜に帰る繰り返しわれの一生の淋しきリズム

『歌集　八千代』

蒲郡　岡本八千代

マラソンのタイム集計を記録する雨の雫のしたたるテントに

学校別コース抽選に集れるテントたるみて雨水溜る

愛教組の闘争委員会に呼び出され戦術会議といふを覚えぬ

婦人教師はただ二人にて愛教組拡大闘争委員会終らむとする

今宵より出だして食はむ目分量の塩にて漬けしわが大根漬

老母の漬けしと同じ茄子の葉のにほふわがひとり漬けし沢庵

昨夜読みて覚えし荘子の「知魚楽」をけさの授業に話し始めぬ

たはやすく教員をやめむといふ君と話しつつ夜の電車二つ遅らす

机低き小学校の教室に集まりて東海女教師学習の会

夜は豊橋昼は名古屋にて母性保護の同じ講座をわが聴きてをり

夜行列車にわれのみのこり今日の会のわが発言をひとりつぶやく

任期終はる副部長われと部長の君と昼日中名古屋の街歩きゆく

白き鳥海にくだるを眼に追ひてテストの机間巡視の歩み

ひさめ降る朝は氷雨の文字教ふ生徒に氷雨ふるを見せつつ

霙の文字辞書に引かせて書かしむるみぞれ降る日の国語授業に

ヌートリア

豊川　弓谷　久子

チューリップの球根を子は植えてをり我は葉牡丹寄せ植えにせむ

御津川の鯉に混りて泳ぎゐるヌートリア見たり始めて見たり

何処より来て住みつきしか鯉の群れに茶色ヌートリア泳ぎてをりぬ

子の投げしパンを追ひかけ泳ぎゐるヌートリア一匹今日の発見

秋の色に染まり始めし御津山を眺めて歩む今日の小春日

家族運よければ万事よしとせむ十一月の我が星占い

好みの色は青とピンクと答えあり双子の姉妹にランチバック縫う

期せずして去年と同じ日なりぬ電気毛布にシーツを掛ける

口ずさむ歌は軍歌と古賀メロデー日向の縁に栗の皮むく

小春日和の一日暮れゆく何事も無ければそれでよしと思はむ

おとなしく

東京　今泉由利

スペインのサグラダファミリアの栞して守るページあり

神様のおられ月のあることをいかに守らむこの月の月

はてしなく大きいという銀河系を地球に乗りて太陽まわる

地球にて世界八十億人口のその一人ひとりのままにひとり

東京の恵比寿に住む昔日のまよい道のただ中を迷子になりつつ

音なしく匂いも色も無となしてそれでも私はしっかり居ます

松の木の冬日の寒さ凌ぐため「こも巻き」をする兼六園

秋の日の大き青空飛行中四十六億年前に生まれし太陽

海王星まで行かなくてよしマイアミまで辿り着けば良い

果てしなく大きいという宇宙につづく方落付き見詰む

地球なる引力身体に感じつつ飛んで飛んでフロリダマイアミ

落ち葉してヤマアララギは辛夷（こぶし）の木三丁目の交差点わき直と立つ

玄関前四階のテラスに届くマグノリア・コブス・辛夷（コブシ）と共生

辛夷咲き苗代を作りはじめよと大豆、ジャガイモ播き時期告ぐる

太陽系の果てより飛び来こしといふ「アトラス彗星（すいせい）」ようこそ私に

ハローウィン

豊川　安藤和代

風清か空の青さよ今朝の窓汁の実刻む音も軽やか

街路樹の公孫樹並木も色増して行き交う車の走り輝く

内閣は変れど変らぬ吾が生活今日も半合の米を研ぎおり

畑隅のコスモス高く花開き風なき空に楚々と揺れいる

曽孫が一年生になる迄は生きるぞ生きよう濃くまゆをひく

菜の花と見違う様な実り田に何ささやくや十三夜月

「明日も雨か！」予報に孫は舌鼓延期延期の野外活動

里芋をコロコロ煮れば秋や秋好みし亡夫の笑顔のうかぶ

嬉しい事あって野菊に語りかけ散歩の足はドレミファソソソ

落葉掃けば背中はじっと汗ばみて風心地よき晩秋の庭

黄昏れてひと際高きひよの声友との別れ惜しんでいるや

ハロウィンに大なる南瓜作りたる志げさん偲ぶハロウィンは明日

風もなき朝の庭に遅咲きの萩こぼれいて冬ももうすぐ

吾れを呼ぶ亡息の声に目覚むれば夜半の雨の激しきを知る

無縁塚誰れ捧ぐるや生花あり初冬の陽射しやさしく包む

金せん花

豊川　山口千惠子

ビスケットの欠片にたかる蟻のむれ一夜のうちに集まり黒ぐろ

金せん花の小さき苗を植ゑしこと今日の一日のわれの仕事は

搗きたての今年の新米小分けして届けてやらむ桃子の新居に

掘り起こし金せん花植ゑむ土の中あわてふためく蛙出で来ぬ

電線に間隔正しく並びたり群になりて飛び来し椋鳥

蘖に小さき稲穂出揃ひて秋あたたかき澄みわたる空

忽ちに刈取り済める秋の日の穭田つづく野の道を行く

刈り取りの済みて静かな田の中にひっそり佇む稲架掛されし稲

いつも来る野良猫に破られしごみ袋食べられる物など入ってないよ

今日こそは燃えるゴミに出さむもうはくこともなき靴手にとりて見る

畑覆ふはこべの青くやはらかき日射し背に受けかきとりてゆく

冬の日に赤き花咲くシクラメン一鉢かざりぬ十一月の尽

弱々しき玉葱の苗植ゑ付けて短かき秋の日の過ぎゆく

勢ひ良く青き葉しげる道の畔赤々咲きし彼岸花のあと

つかのまのはなやかなりしコスモス畑花の終はりて静かなる畑

メタセコイア

蒲郡　杉浦恵美子

家出でて五分も走れば両側はメタセコイアの並木が続く

メタセコイアその名も姿も異国的空を突き刺しのびのび立ってる

メタセコイア絶滅せしとぞ日本から何十万年前には自生の

白亜紀は日本に自生のメタセコイア恐竜たちの背景なるか

メタセコイア左右に見つつのドライブは恐竜時代に空想が飛ぶ

蟻たちの最後の仕事かパンくずを運んで居りぬ晩秋夜更け

知らぬ間に対岸渥美半島に風力発電プロペラ乱立

我が渥美に暮しし頃より半世紀今はこうして対岸に見る

橋あらば十分ほどの渥美半島今は陸路も心も遠い

老夫婦施設に転居の世話なのか娘は他県のクルマのナンバー

娘さんを連呼している老いし父うれしそうやら恥かしげやら

老夫婦これから施設に換はるらし馴染みの医院に別れの挨拶

老夫婦共に持病があるらしく診察室からなかなか出て来ぬ

奥様は夫君に比べ悲愴感表れてゐる施設へ転居

老夫婦施設へ転居我が身にはあらねど何故か身につまさるる

真と偽

大阪　伊藤忠男

金剛のいただき白く風強き厳し冬の日思い起こしぬ

心地よき寝覚めを乱すテレ朝に何が起きたかしばし分からず

同胞と言える隣に何起こる荒れた今年もこれで閉めるか

天災に見舞われ明けたこの年の憂いのままに今があるなり

秋なくて冬は世界の流れなり厳し時代に身震いをする

お前もかシリアも加わる荒れ模様もはや止まらぬ世界の流れ

真実はどこにあるのか今の世に疑うものしか無きが哀しや

優し振り親切まがいの電話声騙す手口は巧妙になる

友手紙携帯ＰＣ何一つ信用できぬと書き添えていた

フェイクでも国のためなら利用するこの世の政治詐欺まがいなり

やっと我が季節きたかと秋の花赤白黄色賑やかな庭

風吹けば葉落ち枝折れ砂が舞う秋の景色はいいずこにありや

夏過ぎて直ちに冬かこの季節体の悲鳴限界なるや

この年の夏の暑さの後遺症大根トマトにキャベツの値段

疑えばきりが無きなり新年は眞を探す年でありたし

庭中改修（その十）

豊川　白井信昭

生垣の柊ひとつ梢より葉の落ちる日日拾うが我日課

生垣に百日紅（さるすべり）の花ジャスミンの白き花との対比鮮やか

東（ひんがし）の狭庭辺跡また庭中と蛍石（ほたるいし）あまた敷き詰め了（お）へり

橋渡り細道狭（せば）め萩の花見る人なしにはや散りゆく

み社の万葉史跡歌碑ずらし老松一つ伐られてありぬ

中島の農道巡る中にして芒穂なびく高架下あたり

霜月入りわが横の道排水路浚渫（しゅんせつ）工事しらす看板

横の道ガードレール沿いセイダカの素枯れしままにようやく刈られぬ

角口の木香薔薇(もっこうばら)根本はみだしし菊の一群ことごとく黄

いつしか擁壁の上(へ)に白菊は桃の斑入(ふいり)花今が見頃とも

角口のＬＥＤ光照らさるる菊の白黄花斑入模様

孫匠真五歳十か月内揃いて小春の如(ごと)七五三参り

久久に一宮砥(とが)鹿神社客殿に晴れ着集いて順番を待つ

車庫の中(なか)豆板一枚七〇キロ七枚すべて片付けんとする

車庫の奥整理終えて今日よりは車下げれば二台駐(と)めれり

「朝のリレー」

埼玉　矢崎直人

二ヵ月後社会福祉士国家試験直前対策毎週の模試
得点が伸びぬ所に気がつきぬ毎週模試を受けてくうちに
繰り返し反復練習問題を一問一問お昼休みに
難問に挑む問題点を識る辿り着くには補助線を引く
冬の朝電車に谷川俊太郎「朝のリレー」の詩が中吊りに
「朝のリレー」その詩谷川俊太郎その詩の似合ふ冬の朝かな
近づいて離れて距離を確かめて一歩一歩を積み重ねてく

冬の日や鳥の楽園鳴き交わす南を目指す旅の途中で

来る冬の遅れた年のひと日ごと気温が下がり紅葉すすむ

高きから遅れ色づく紅葉の下後ろ脚犬がつち蹴る

冬青空雪を頂く白き富士冬がきたこと林の間に見ゆ

曲がり角一つ曲がって目が覚めてバス停一つ乗り過ごしている

郵便のポストの隣消火栓忘れて置かれたダウンのコート

冬が来てダウンのコート出してきて風通さずにやっぱりこれと

ＳＮＳにたぶらかされているかもとスマホを見ている人を見ている

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

牧原規惠

年重ねし女四人(よったり)集まりて七十九歳若いと言はれて

十五年ぶりにか祭りの餅投げに孫と一緒に張り切りてをり

葉ばかりが育ちすぎたるサツマイモ備中の先にさびしき実り

最近若い人達との接点が少なくなっています。畑の行き帰りに出合う人との話題も片寄りがちになっています。

稲吉友江

車窓より輝き見ゆる十六夜の月光淡く鋸屋根へ

日溜りにいつまでも猫ぢつとして何を思ひて何を見てゐるの

スーパーの魚売り場の秋刀魚の前値段を見ては行きつ戻りつ

小一時間程同じ場所にジッといる猫。彼等にはどんな世界があるのか。ふっと思った午後の日でした。

けふ小鰺醤油干しにせむ取つときの刺身包丁きらりと光る

ありあはせのステンレス笊に小鰺干す夫はすすんで時々返す

頃合ひよく干しあがりたり醤油干し焼きたて小鰺は織部の皿に

息子たちも喜んで食べてくれた小鰺の醤油干し。かつては妣がよく作ってくれました。今は私の定番料理です。

鈴木美耶子

蜂の巣をおとして三日落ちしまま蟻も寄らぬか殺虫剤まみれ

百日草マリーゴールド咲き続く菊の蕾はなかなかあがらず

五種類のマンホール並ぶこのせこ道踏まずに通る黄は消火栓

暑さはなかなか治まらずお盆過ぎてから二十センチほどの巣が出来ており、無事に蜂退治しました。

牧原正枝

吾が庭にかつてありたりキンモクセイ香に誘はれ木に会ひに行く　　森　厚子

そぞろ歩き帰りの道に香り来るキンモクセイよ先生の庭に
腰痛め眺めゐる日々隣家の秋桜揺れるを楽しみてをり

先生の庭にキンモクセイがある事を今まで気づかなかった自分に驚く。先生が知ったら笑われることでしょう。

ゆれゆれの谷瀬の吊り橋渡らむと見やれば彼方に君が手を振る　　水野絹子

御城番屋敷を囲む槙の実のほのかに甘く幼き日泛ぶ
布を織るカッケマ我の年頃か二風谷コタンは人影の無く

十津川の住民が自ら負担して架けた谷瀬の吊り橋。とんでもなく怖かったです。住民の思いの伝わる橋でした。

縁ありてこの病院にまた通ふアメリカフウに秋の陽が照る

真夜中に目覚めてユーチューブ開きたりジムノペティしづかに流れ

隠口そらみつやまと友はゆく秋の気配の空に筋雲

十一面観音拝観ツアーに参加の友よりメールが来た。桜井の秋の空。聖林寺の観音さま。もう一度会いたい。

大武智子

現代学生百人一首

東洋大学

家の中授業を受ける弟の背後を通る私は忍者

専修大学附属高等学校２年　**小塚　萌愛**

祖母からの贈り物には茄子があり畑が薫る今日の夕飯

貞静学園中学校２年　**高橋　永尚**

リンリンと風鈴揺れて目を覚ます今年は行かないラジオ体操

貞静学園高等学校１年　**井上　璃音**

ぐうたらの父も外では郵便屋日焼けでわかる灼熱地獄

貞静学園高等学校２年　**松橋　明句**

アクリル板マスク消毒ディスタンス慣れたくなかったこんな生活

東京都立片倉高等学校２年　**樋口　壱之介**

蝉の音が読んだページに刻まれて参考書から八月の記憶

東京都立片倉高等学校３年　**宇佐見　翔**

寂しいな私の問いには生返事一緒にいても目線はスマホ

東京都立府中高等学校３年　**北湯口　莉奈**

コロナ禍で身近になった黒マスク対策のはずが今では親友

東京都立本所高等学校２年　**岡本　春紀**

『俳句』

元号の変り目にあり冬木の芽
人影の重なりてゆく小春かな
又ひとつ句集届けり冬暖

植村公女

踏み歩く欅落ち葉の吹き溜まり
飛び出してヘッドライトに竦む猫
亡き友とラー油と湯気ともやし麺（そば）
木枯らしや家人の声の暖かさ
があごおと生きる証しや冬いびき

木村歩歩

呆け除けの像なでもして神楽月
この先は三国峠や冬ざるる
船頭の寄進の絵馬や雪起こし

今泉如雲

後ろ脚土蹴る犬の紅葉かな
模擬試験また模擬試験十二月
冬の日やバス停一つ乗り過ごす
「朝のリレー」思い出したる冬の朝
武蔵野や冬青空の富士の山

飛行機の窓から地球晩秋
一三五億年前にあり十三夜月
大切なこと過ぎゆきぬ晩照
夕空に一つしかない秋の月
はぐれ雲はぐれたまま秋の末
湯たんぽの温々温もり甘える
湯たんぽのこの暖かさ一人じめ
一葉落つ一葉拾ひぬ秋に入る

矢崎直人

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

色鳥や鯉も恋いしや三渓園　木風

乱れ飛ぶ多少の縁か稲雀

散歩道片手伸ばせば熟し柿

百八つ忸怩たるありあるがまま

団塊が喜寿を踏み越え初日の出

甲斐の国風林火山を思いだす　雄山

バス乗らず秋探しへと散歩道

かぜ寒し帰えり急ぐ酉の市　恵風

木守りの熟柿一つ夕映えに　雅山

墓参りお国なまりが懐しい　紀山

庭先は秋の草へとひきわたし
秋祭り親子そろって息はずむ
秋の草小さくなって実をこぼす
初御くじしきりに眺め首を振る
転がって死んだふりする黄金虫　金子

折々の詩（十一）

ふじの　けんじ

祈り

遠い昔　母の手に引かれ
森の中を　どこまでも　歩く
光と風と　母の柔らかな声が　体を
包みこむ

なぜ生まれて来たのか
なぜここにいるのか
ただ独り　歩まねばならない
人生の　不思議を
抱え込みながら生きる

遠い昔の　面影を　水面に移しながら
鍵盤の　音は　鳴り続ける
永遠を　刻みながら

あの人と　歩みたい
あの人の　もとに行きたい
突き上げる　祈りが
からだを　持ち上げる

もう大丈夫よ
柔らかい声は　母だったのか
その声は　自分から発せられたのだ
声は透き通りながら
永遠に　こだまする

五感を澄ませば（31）

杉浦恵美子

坊主めくり

ある若者との会話

「世界の三大美人って？」

「楊貴妃、クレオパトラ、小野小町」

「ふーん、日本人も入っているんだ」

「でもこれは相当アヤシイわね。楊貴妃は豊満な、クレオパトラは鼻筋通ったエキゾティックな美女をイメージできるけど、小野小町なんて肖像画ひとつないし、大体平安時代の美人の条件は、髪が長くて豊かなことと子供っぽく小柄であることだから、普遍的な美人と言えるのかな」

余談ですが、説話によくあるように、小柄でないと背負って盗み出せませんから。

後で調べてみると、やはり日本独自の観点で、明治中期からこのように言い出されたようです。

小野小町は百人一首の

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に

の作者として有名ですが、素性については一切不明です。和歌の名手であることから、美人に違いないと決めつけられたのでしょうか。

ところで、百人一首そのものに関心のなかった子供のころは、読み札を使った「坊主めくり」の方が楽しかったものです。

姫を引くと、ラッキー。場の札を全部自分のものにできます。

姫の絵柄は全て色鮮やかな衣装をまとっており（今見ると衣装に埋まっており）、その美しさと幸運が相俟って何か特別感がありました。

百人一首とカルタが結びついたのは江戸時代らしいですから、姫の絵柄も江戸時代の人が往古をイメージして描いたものでしょうが、綺麗なのは衣装です。

顔が描かれている札もありますが、象徴的だと思われるのは後ろ姿の絵柄。やはり流れるような長い髪がそれだけで美人の典型だったのですね。

同時に、極端に言えば、目がぱっちりとか、鼻筋が通っ

ているとかは問題ではなく、後ろ姿から、各自が思う美人を想像すればよかったのでは？

日本的な奥ゆかしさなのかも。

さて、姫の札つまり女流歌人の和歌は21枚あります。つまり全体の約1／5。

内訳は、女帝1（持統天皇）内親王1（式子内親王）母2（右大将道綱母、儀同三司母）残り17枚は宮中の女房達。

小野小町・伊勢・右近・和泉式部・紫式部・大弐三位・赤染衛門・小式部内侍・伊勢大輔・清少納言・相模・周防内侍・祐子内親王家紀伊・待賢門院堀河・皇嘉門院別当・殷富門院大輔・二条院讃岐

こうして並べてみると、歴代才女の錚々たる顔ぶれなんだろうなと思われます。

そして改めてこれらの和歌を読んでみると、恋の歌は、どんなに身分が高かろうと、待つ身の辛さを訴えていて、切なくなります。

当時の貴族は汗水たらして働くことはないので、恋愛が生活や関心の中心だったのでしょうから余計にです。

同時に、選者の藤原定家の、各時代の優れた歌人を選び、さらに歌人の膨大な作品の中からたった一首を選び出す作業というのは、並大抵ではなかったと思われます。

何日もかけて一首を選んでも、また思い直して差し替えたことも数知れずでしょうし、人選も泣く泣く差し替えたこともあったでしょう。

定家の人生の中で、どれほど膨大な時間を費やしたことでしょう。

現代のパソコンやコピー機がないどころか、夜など心許ない蠟燭？の灯りの下で。

それが今私たちは有難いことに、綺麗に百首にまとめられた秀歌集を、和歌の入門書として目にすることができます。

あまりにも身近なため、気にも留めなかったことも視点を変えてみると、面白い発見があるなと思ったことです。

小野小町の生涯朧も宜なりけり百年前の我が祖母のさへ

附　録（三十一）

矢　崎　直　人

後ろ脚土蹴る犬の紅葉かな

一日一日過ぎる度に一度ずつ気温が下がっていきました。今年は暖かい日が続き秋が長かったですがいよいよ冬本番です。樹々の紅葉は上から色づいていくのが分かりました。散歩の犬が後ろ脚で蹴る土に枯れ葉が混じります。

高きから遅れ色づく紅葉の下後ろ脚犬がつち蹴る

模擬試験また模擬試験十二月

来年二月の国家試験まで受験対策の講座を取っています。十二月からは毎週予想問題の模擬試験です。上がったり下がったりの点数をみながら反復練習を繰り返す日々です。

二ヵ月後社会福祉士国家試験直前対策毎週模試を

冬の日やバス停一つ乗り過ごす

冬のやわらかい日が射して暖房が効いたバスの中でうとうとしていたら、うっかりバスを乗り過ごしてしまいました。いつもの通勤のバスで慌ててしまいました。幸い一つ乗り過ごしただけで済みました。

曲がり角一つ曲がって目が覚めてバス停一つ乗り過ごしている

武蔵野や冬青空の富士の山

冬になると雲一つない青空の日があります。そんな日は富士山がよく見えます。雪を被った富士山を見て冬が来たなと実感しました。武蔵野は平坦なようで起伏があります。富士山が見える場所を見つけると楽しくなります。

冬青空雪を頂く白き富士冬がきたこと林の間に見ゆ

『喜寿 十一年』

中屋保之

『魁(さきがけ)も殿(しんがり)もなく秋終わる』、私の所属する会の会長が新聞の投句欄で見つけたと教えてくれた。言いえて妙とはこの事であろう。

石川啄木に「東海の小島の磯の白砂に　我泣き濡れて蟹と戯(たわ)むる」がある。老境の私は、「水溜まり超えるつもりが足絡(と)られ　我泣き濡れて老いを知らされ」である。そんなことを考えて未だ寝床から出られないでいる。

私たち昭和二十二（一九四七）年生まれは昨年、喜寿を通過した。大学時代私が所属した「部」の同期が、十月終盤だというのに残暑真っ盛りの中、東京池袋のレストランに集まった。無事（？）卒「部」した仲間は、女子部員四名と男子部員九名、誰一人欠けることなく顔を揃えた。〝良き哉、青春〟と言いたいところだが、数の少ない女性軍の元気を通り越してかしましいのに比べ、男どもはその半数がトイレに立つ際、杖に頼っているのだった。負けた！

お開き後、杖組は女性軍にエスコートされながら、歩いて10分もかからない池袋駅までタクシーを使って帰路に就く始末であったが、「病人が病気見舞いに病院へ　辿り着いたら即入院」なんて、シャレにもならない。とにもかくにも全員が新しい年を迎えられることが何よりも嬉しい。　昨年は、災害と紛争、それに民主主義が危ぶまれる

様相の選挙に明け暮れたように思われる。「戦後ベビーブーマー」の私たちも、いつの間にか老境の域に達したが、ちょっとおかしくなりかけている世の中でもうひと踏ん張りせねばなるまい。何が出来るか、心許ないが・・・

少し前から試していることが幾つかある。挨拶とお礼をハッキリ言葉にして相手に伝えるよう心掛けてみている。電車やバスの空席の前に立つ若者に〝座ってもいいですか？〟と周りの人にも聞こえるように言ってみる。すると、大抵はびっくりしながらも顔を私の方へ向けて頷いてくれたり、〝どうぞ〟と笑顔で言ってくれる人も少なからずいる。私の家の周辺にも日本人以外の住人が増えてきている。中には、日本語が不十分な方も。そんな状況に出会ったら先ず〝おはようございます〟〝寒くなってきたね～〟を何度か繰り返す。すると、先方から声を掛けてくれるようになる。近所付き合いが「防犯効果」を生む、と思う。更には、言葉のやり取りで私自身の「ボケ防止」にもなるから一石二鳥であろう。新しい年にどんな出会いが待っているのか、ワクワクしている。

「正月は冥途の旅の一里塚　めでたくもありめでたくもなし」　あの一休さんの句である。正月に頭蓋骨を持ち街中を歩いた、という逸話も残っている。

「賀状より〝今年限り〟が上回り　めでたくもありめでたくもなし」　駄作ご容赦。

今年もよろしくお願い致します。

『酔いの徒然』（一五三）

丸山酔宵子

『ウズベキスタンを訪ねて』

時雨るるや成田の先はタシケント

酔宵子

11月15日。時雨れる肌寒い、まだ薄暗い夜明け、目黒の自宅を出て、東横線の都立大駅から上野経由京成ライナーで成田空港大地ターミナルへ。

いよいよウズベキスタンへの出発である。ウズベキスタンは中央アジアに位置し、中国と地中海地域を結んだ古代の交易路シルクロードの要（かなめ）。将にロマンに包まれた憧れの大地である。

今回のウズベキスタン旅行は一年から計画していたが、10月末に、銀座ヒューマントラスト・シネマでウズベキスタン映画の予告編が流されたのである。それではと、今回のウズベキスタン旅行出発の前日11月14日に、その感激的ウズベキスタン映画『草原の英雄 ジャロロフ　東京への道』を鑑賞したのである。

2021年8月8日、ウズベキスタンの英雄バボディル・ジャロロフが両国国技館で行われた東京オリンピック・ボクシングスーパーヘビー級決勝戦で、アメリカのリチャード・トーレスを打ち破り、金メダルを獲得した実話の映画化なのである。

広大でロマンあふれるウズベキスタンの大地を舞台に、ジャロロフがリオ・デ・ジャネイロ・オリンピックでの敗退をバネに、逞しく鍛え上げていく様を描いているのだが、将に、明日からのウズベキスタン旅行に熱い思いを投げかけてくれた。

因みに、今年のパリ・オリンピックで柔道女子52キロ級の日本のアイドルであった阿部詩を2回戦で〝一本〟で破ったのはウズベキスタンの世界ランキング一位ディヨラ・ケルディヨロワで、金メダルを獲得している。

前置きはさておき、成田から北陸、日本海、韓国、中国大陸を真横に縦断し、雪に覆われた天山山脈を越えて9時間半、ウズベキスタンの首都タシケント空港に到着である。時差は4時間、気候も日本とほぼ同じで、綺麗に整備された緑多い街並みをホテルに向かう。

さあー、これからいよいよ、4ヵ所の世界遺産を巡るアドベンチャーの始まりである。

ウズベキスタンの歴史は大雑把に一言でいえば、イスラム教の伝播と蒙古族（チンギスハーン）の侵略とティムール帝国との確執である。

先ずは、古代ペルシャ時代からカラコルム砂漠への出入り口として繁栄した城壁の街ヒヴァである。ヒヴァ城壁内のレストランで夕食後、ホテルにゆっくりと歩いて行けば、夜空には、日本で見る満月の2倍程もある様な、馬鹿でっかい満月が顔を出しているのである。

満月が青のモスクを包み込み

酔宵子

ヒヴァから僧院の都ブハラへ。

ウズベキスタンの重要な農産物である綿花畑が続く広大な大地を、只管（ひたすら）走り続ける。ウズベキスタンは果物の宝庫で、ウオーターメロンがこの地方の特産である。

綿畑（わたばたけ）続く街道僧都へと

酔宵子

ブハラから、将に憧れのサマルカンドへは最新の新幹線である。残念ながら日本製ではなくスペイン製の新幹線だが、基本コンセプトは同じ。車窓から収穫の終わった葡萄畑が続いていて、ウズベキスタンワインも昨今評価されているとのことである。

陽が落ちてサマルカンドへ枯野行く

酔宵子

いよいよ、〝青の都　サマルカンド〟〝イスラム世界の宝庫〟〝東方の真珠〟と称され、常にシルクロードの中心として繁栄した世界の憧れの都である。そのド真ん中に位置するレジスタン広場にはサマルカンド・ブルーと呼ばれるモスクがずらりと並び、荘厳な威容を誇っている。

因みに、モスクに入るためには、女性は必ずスカーフを被ることは必須であるが、一番大切な儀礼は、モスクには右足から入らねばいけないことなのである。

小春日や右足先にモスク入る

酔宵子

バンビのビンバ

高橋育郎

バンビのしっぽに　蝶々が
とまった
バンビはびっくり　ふりむいた
それでビンバ

バンビがころんだ　雪のなか
けしきが　さかさま
それでビンバ

バンビがおいけで　水をのむ
ともだちさかさま
それでビンバ

バンバンバンビのビンビンビンビンバ

ウォルト・ディズニーの傑作アニメ
日米講和の締結　ちょっと前
アメリカからやってきた総天然色映画
極彩色に　胸躍らせて
ロードショーを　観に行った

バンビと蝶々の名場面
静止画像のポスターを
ボクはノートに描いてみた

心に残る映像は　いきいきと
甦ってくるよ　あの時代

楽しさ詰まった　贈り物

絹の話（170）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

『涼州詞』からシルクロードを思う

葡萄の美酒夜光の杯
飲まんと欲れば琵琶馬上に催す
酔うて沙場に臥くすも君笑うこと莫れ
古来征戦幾人か回る

王翰とその時代

王翰は唐の興隆期（西暦７００～奈良時代）高官で詩人。シルクロードの往来で絹や紙が西に、貴石や絨毯などが東へ、人も宗教や技術も活発な交流がありましたが、北方からの匈奴、南からは吐蕃の侵入が絶えず、国境と交易ルートの守りは唐の繁栄に欠くべからざるものでした。「涼州詞」はそのような時代に兵士となって長安の都から西に赴く若者の心情を王翰が詠んだ詞で、その後の詩歌の世界に大きな影響を与えた一作です。

涼州とは

涼州はシルクロードの入り口に至る河西回廊が通じる中国領土の最西端の地域で、カザフ族や漢族、チベット族など多くの人々が交易で交わり、酒泉などは西方に旅立つ人を見送る最終地点でもありました。

酒泉とは

酒泉とは涼州でも東に位置し、河西回廊の終点に近く、ゴビ砂漠の先の天山山脈の伏流水が湧き出る風光明媚な所で、ここの水は酒造りに適しているのでこの様な名前が付けられたそうです。（日本で言えば養老の滝でしょうか）漢の武帝に命じられてシルクロードを開くきっかけを作った張騫もこの地で一休みして大月氏のもとに辿り着いたのでしょう。

この詞がよまれる少し前に玄奘三蔵（三蔵法師：経蔵、律蔵、論蔵を修めた者）もここで旅の装束を整え、天山北路をたどってインドに赴きネパールに近いナーランダ寺院で唯識学を修めます。

また日本の童謡の「月の砂漠～」の歌は千葉県木更津を舞台に作詞されたものですが、酒泉の湧き出ずる水に月が映える情景が、この歌にピッタリと言われています。

葡萄の美酒

葡萄は西アジア（コーカサス～カスピ海沿岸）原産で、当時すでにオアシスを経由して甘粛省などでも栽培されていて葡萄酒も作られ、赤ワインなどは長安でも飲まれ

ていたようです。

この詞では遥々涼州の酒泉まで見送りに来た友人が最後の別れを惜しむ為に、現地特産の夜光の杯にシルクロード東の終点よりさらに北東の西ゴート（現在のフランス～ドイツ方面）から運ばれた上等の白ワインを注いだのではないでしょうか。日本で葡萄は奈良時代には甲府地方で栽培されていた様です。

夜光の杯

古く中国の周の時代（紀元前１１００～前２１０年）には酒泉のさらに東のホータンで採れる「ホータン玉」で造られた玉杯が周の王に献上されていた様です。その後輸送途中の破損を減らすため、原石を酒泉に運んで造る様になりましたが、ホータン玉が枯渇して来て、当地で採れる縞模様のある蛇紋石（墨玉、碧玉、黄玉の三種）が使われると、月の光に美しく映える事から「夜光の杯」として珍重される様になりました。

この詞では、杯をうける友は玉杯が月に照らされて美しければ美しいほど、酒が美味しければ美味しいほど望郷の念にかられたのでしょう。

琵琶馬上に催す

西アジア（ペルシャ方面）のウードやバルバンドが原型と言われる琵琶はこの時代のこの地域では一般に吟遊詩人が馬上で奏でるもので、それを聴きながら杯を重ねたようです。

またこの地域の馬は汗血馬（千里の馬）の産地（フェルナガ：今日のウズベキスタン）に近く、大型の馬が多く異国情緒を感じさせられたでしょう。

＊琵琶が日本に伝わったのは奈良時代のようです。

＊日本でも平安時代から鎌倉時代にかけて街中で琵琶を弾く琵琶法師がいました。江戸時代には新内流しがあったり昭和の頃までは街に流しのギター弾きがいました。

沙に場臥くすも～古来征戦幾人か回る

昔からここより西に赴いた者で、何人還って来た人がいるだろうか。今宵は沙場（戦場）に酔い潰れても笑わないで欲しい。

日本でも召集令状が届いて入営する前の日に、親族が集まって送別の宴を開いたのは記憶に新しい事です。

ああ玉杯に花受けて～、かよえる夢は崑崙の～

前者は旧制一高、後者は旧制三高の寮歌です。明治時代の初期に二十歳に満たない青年達が大望を抱いて闊歩する様子が手に取れる様に判ります。

いづれにしても夢は中国大陸にあった様です。

「江上浩二の独り言」85

江　上　浩　二

また新年に人工知能ＡＩのキーワードを

最近の人の不創作性

〝机に向かう〟という言葉がありますが、昔は書籍を読んだり、書をしたためる事が創作活動に繋がっていたようだ。現代では、机に向かうは死語で、パソコンなどＩＴツールに向かう時間が非常に長い。それも、固定した机でなく、モバイルと言って、歩きながら、電車や自動車で移動しながら、ＩＴツールに向かうようになっている。せめて、どこかへ移動するまでは、ゆっくりと街並みを眺めたり、通り過ぎる知らない人の会話や、店から聞こえてくる雑音などを聞いて、皆さんが何をしようとしているのか想像したり、また漂うレストランの匂い、流行りのパティシエのお店の中の綺麗な〝作品〟を眺めたりする時間にしたいと思っている。

コンサルの仕事で、翻訳の仕事でも、言語として翻訳する作業時間はあまりかからないと思っていても、依頼先がカッコよくＩＴツールで作成した電子ファイル上のテキストや図のキャプションだけを翻訳しようとすると、結構厄介で時間が費やされてしまう事を昨日経験（十五年前のこと）した。恐らく、〝机に向かっている〟時間の半分がＩＴツールの操作だけに取られていたようだ。余計なマウス操作、ボタンのクリック回数だけが異常に多く、何らの新しい創造、創作に結びついていないと感じた。

ＩＴツールが創作活動をより刺激的にしてくれて、効果的な側面を有する事と、何せ移動中でも、せかせか指を手品師のように動かせることが、そのＩＴツールの創作性をさらに助長していると思われるシーンが、実はＩＴツールそのものを操作する時間だけに費やされて、結果は綺麗な資料だけ、見栄え良く完成するだけで、それほどの創作に結びついていないことを実感した。

是非、折角のかっこいいＩＴツールを使いこなした創

作がどんどん出来てきて欲しいが、そのツールに自分が使われてしまっていることに気がつかず、毎日を送っていることにも早く気付いて欲しいとも思う。

右の文章は私が十五年前の六月にマイブログで呟いたもので、はっとしてしまった。

それは、昨今実用・応用と言って昨年のノーベル賞まで取ってしまった人工知能ＡＩのことを、皮肉に言い当てているような、ある種の事前警告みたいにして、自分に対して、いや今既に利用し始めている多くの地球上の人間に対しての言葉に想えた。当時、パソコンが急速に普及し始めて、シニアの世代も企業事務所で利用しなければならないという状況になって、リスキリング、イノベーションが叫ばれる中、ただ浪費的に、創作・創造に繋がらない時間をパソコン機器の操作に費やしてしまわずに、本来の創作・創造性向上になるような活動にして欲しいという私だけでなく、多くの人達が願っている。

そこで皆様に問いたいのだが、ニューロモルフィックな回路構成をベースにした計算方法と限定分野のデータベースを事前に覚えさせて（これは machine learning 機械学習と言われる）、限定分野でのみＡＩを作動させて、得た結果を鵜呑みにして、人を判定したり、将来起きるかも知れない大事な事象を〈そうだ〉として、右から左へ受け入れてしまっていいのだろうかという疑念、一歩引き下がって〈そうかもしれない〉と少し疑い再検証をやってみようと思う人達が増えてくれることを信じたいのです。

もうかなり前に日本でも人工知能の実用化に向けた学官民が本気になってプロジェクトを推進して行こうという話を聞いてから、私個人もこの分野に関心を持っており、新年になると、初夢をみたので、私もＡＩの分野の知見を深めたいと年始めの意気込みとして、度々新年のご挨拶がわりにさせて頂いております。巳年の自分としても、追及してみたいと思いますので宜しくお願い致します。

初狩便り（38）

花野みぷり

小豆（あずき）

小豆はお祝いの度に登場するうれしい作物だ。小豆の「赤」は邪気を祓い、厄除けの力を持つといわれ、慶事や季節の行事などに登場してきた。小豆があれば、お赤飯、おはぎ、お汁粉にあんころ餅と、おいしく楽しいメニューができる。そこで小豆の栽培にチャレンジした。

一年目はもうすぐ収穫という時に、鹿に莢（さや）ごと残らず喰われた。二年目は無事に収穫でき、三年目の昨年も豊作とはいかないもののそれなりに収穫できた。小豆は、一斉採りはできず、茶色くなったものから三回にわけて収穫した。屋根のある場所で、十分に乾燥させ、莢から小豆をはずし、良い豆だけを選別する。地味で時間のかかる作業だが年寄り仕事としては悪くない。二升弱の小豆が採れた。

寒い日の注連（しめ）飾り教室のおやつとして、ぜんざいになった。収穫してひと月も経たない小豆は「あく」がなく、すぐ柔らかくなり、なんともおいしい！　年末の餅つきには、あんころ餅として登場した。四月末の「笑顔の田んぼ・みんなの畑」の総会では、お赤飯として振舞われる。

小豆は素敵、小豆を食べるとなんだかしあわせになる。

（写真　内山和夫・丹敬二・朝妻僚子）

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言
https://hondachiro.exblog.jp/

2024年12月04日

乾燥には

晴れ間が続き
青空が綺麗で　雲が高く
鳥の鳴き声も朝から聞こえ
天気が良いだけで元気になります
ありがたいことです
ここ最近
空気が乾燥してきました
乾燥といえばウイルスが繁殖しやすい環境です
ですので
マスクなどで咽頭を乾燥させない様に
忘れがちな水分補給をしっかりして
気をつけていきましょう
肌のケアも大切です
皮膚が乾燥すると化繊などの影響が出やすくなります
ですので
肌に触れる部分の衣類は　天然素材をお勧めします
朝やお風呂上りなどは
ワセリン　を使い身体の水分を逃がさない様にし
なおかつ化繊などから皮膚を守りましょう
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

2024年12月16日

温かいお茶

日が暮れるのが早くなり
お天道様が沈むと途端に寒くなります
つくづく陽の光のありがたさを感じます
寒くなると
お勧めしているのが暖かい飲み物ですが
一つ気をつけて欲しい事があります
温かいお茶は　がぶ飲み　しないで下さい
なぜなら　胃に負担がかかるからです
お茶は　うがい　にお勧めするほど
強い効果があります
ですので

空腹時はもちろん　がぶ飲み　には適していません
今の時期　腎臓などの問題が出やすい為
身体が水分を欲しません
本田カイロの施術後は　水分補給しやすくなります
そこで
喉を潤すという考えであれば
温かいお茶はお勧めです
喉が渇いている時　がぶ飲みしたい時は
水　がお勧めです（夏以外）
温かい飲み物は　もちろんお勧めです
３Ｓ＋ゆたぽん＋ヨーグルト＋八分＋湯船
今日も笑いながら楽しんで行きましょう

康鍼治療院（www.yasuhari.com）　玄　翁

「乙巳の歳」

令和七年　乙巳の歳
六十年の循環の　四十二番目の歳まわり

「乙」は十干二番目の
木の弟の陰の年回り
「乙」は生まれて間もなくの
伸び広がりゆく　前の時
生長の為の根を張りて
徐々に伸長する姿
木の性質　主る
動きと成長の足場を作り
新たな変化が始まる時

「巳」の歳　十二支六番目
火性の陰の性質で
陰陽盛衰　変化の中で
成熟　極まる時となり

新たな結実　始まる時
火の光により　万物を
照らして　はっきり映し出し
良くも悪くも物事が
はっきりしてくる　年回り

「乙」と「巳」との関係は
木生火という相生で
木は燃え火を生み促して
新たな生長・未来への
動きを作れば　実を結ぶ
この数年で　内面に
火がつき燃やしてきたことが
此処ぞとばかりに爆発し
大きな変化が生み出される

粘り強くも消えざる火
心の内の火　燃える時
心のままに動いていけば
炎が業火となりなりて
根の無い思いを　焼き尽くし
迷いが晴れて繁栄す

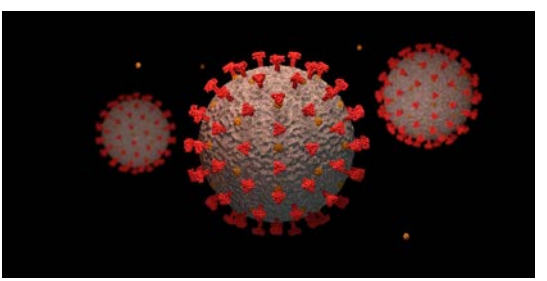
「風邪は万病の元」

「風邪」は天の気　一年の
全てに関わる　邪気として
寒邪や　熱邪や　湿気の邪
様々な邪気と合わさって　弱った体に　侵入す
「風邪」が体を傷る時
悪寒　発熱　頭痛して
鼻塞がりて　嚔して
節々痛みて　咳が出る

これらは邪気への反応で
様々症状出るなれど
免疫力の働きは
発熱させて汗促し
邪気の風邪や寒邪など
外に出そうとしているぞ
特に首や背中から
汗が出せれば邪気抜けて
自ずと解熱し　症状は
治まり　免疫強くなる

この時　すぐに薬にて
頭痛や発熱抑えれば
症状楽にはなるなれど
解熱によりて　汗出でず
邪気を排出する力
抑えてしまって　邪気残る
「風邪」の邪気が残るなら
鼻・喉奥の扁桃は
慢性的に炎症し
神経・免疫　かき乱し
あらゆる病気の元となる

万病の元の「風邪」を抜くには
鼻・喉　うがいで綺麗にし
首・肩　つまりや強張りを
取るべく　適度に運動し
ゆっくり風呂にて温まり
じわりと汗かきゃ邪は抜ける
万病改善　汗にあり



乙巳元旦に作有り

横山精真

旦日年を新たにして海東に燁く
芙蓉は雪を被いて　西空に映ゆ
須く正道に親しみ　良友を成すべし
限り有るの人生　学びに終わり無し

乙巳元旦有作　（乙巳元旦は兼題）

旦日新年燁海東　芙蓉被雪映西空
須親正道成良友　有限人生學無終

（語釈） 旦日…朝日。o芙蓉…富士山。

（通釈） 年空けて朝日は東の海に輝き、富士山は雪を抱いて西の空に美しく輝いている。

さて吟友よ今年は一層正道に親しみ良友を求めようではないか。

限りある人生だが、学びに終わりは無いのだから。

※元旦を迎える。巳の年と云えば義父であり、弊流の祖宗範・横山岳精、恩師・原文二先生、そして吟でご縁を得た作詞家・丘灯至夫先生。と三先生が揃って大正六年の巳年である。私と三十歳違いだから、ご存命なら百八歳だ。社会に出て出会いを戴いた三先生である。それぞれに時宜を得て出会え、また、人生最大最高の恩義と影響を受けた。出会えなかったら、又時期が違っていたら我が人生は……？

人が人に繋がり適当な時を得てご恩を深く戴く事になった。真に運命とは絶妙である。

私は今年の誕生日で喜寿を過ぎる。ここ迄曲がりなりにも歩んで来た。あくまで曲がりなりにである。七十三歳の時「自在の心」と明言して己を叱咤したのは正解であったと思う。

人様には恥ずかしくて言えない状況があっても、ここまで来たからには歩んで来た道を全うすべく堂々と心を表現したい。自分に会得できていなくても理想の火を燃やして行きたいと思うのだ。吟にしても詩にしても、又派生した歴史に学ぶ処はいよいよ面白みが出て来るのを感じる。若い時には思ってもみなかった事だと言える。そして私には良友畏友がある。

幽明を隔てた師友に毎日手を合わせ今年に挑もう。皆様が平和でご多幸でありますように。

百八つ忸怩たるありあるがまま

団塊が喜寿をふみこえ初日の出

編集室だより【二〇二五年一月】

今泉由利

歌集「地球にて」

一九七九年

口の中に苦味の残りて清々し川根のお茶の日本に居り
ポルトガル語とスペイン語交じえて話しゆく土曜の午後の新宿の町
公孫樹の枝かすめてバスの走りゆく去年の冬と同じ東京
大切な物とスーツケースに仕舞い込む乾きて軽い河豚の鰭等
早くよりアルゼンチンから電話掛りマエ茶を飲みぬ朝の食事に
ようやくに辞書の置場の決まりしを旅の荷物を作り始めむ
アルゼンチンに織機四台持ちおりぬ又買い足しぬ卓上の機を
易々と十キロの小包の出来上がる鹿尾菜（ひじき）も若布（わかめ）も九ヶ月分の量
心痛むことは言はずに騒がしき時を作りて帰り来にけり
洗足の池の緑の映る日を思い描きつつ立ち帰りゆく
朝夕に眺むる池に足を洗いし日蓮上人の二十八代目のわが子
飛行機の小さき窓に頬寄せてオンタリオ湖は凍りいるらし
円とドルとクルセイロに入れ換える私の蟇口は江戸小紋なり
芒の穂波だつカンポの見えくれば長き長き旅の御仕舞
黒く光るパパイヤの種子を取り出（いだ）しブラジルの夜風涼しくなりぬ
割箸の副木小さく見ゆるほどに二夏過ぎし私のオンブー
幼らの残して眠るひとことを噛みしめておりおかあさんの家
日本に残し来たりし大根の半分を惜しむ今日の昼餉に
枝先の花をわうかに残しつつハカランダありわが子らの国
吹く風に夏の終りの伝いくる南十字星あり八階の窓
ボラーチョの花満ち満ちて咲く並木今年も集めむ落ちくる花を
忽ちに子らの友達集まり来てスペイン語の国のスペイン語喧し
日本より最も遠き距離の国アルゼンチンのスペイン語親し

ひと夏に曲り伸びしオンブーの姿直(ただ)さむ鉢をまわして

古伊万里にスパゲッティを盛りてをり窓辺には私のオンブー揺れる

洗面のたびに対(むか)う私の顔あきらめ知りたる部分のありぬ

大木になるべき素質のオンブーに加えてやりぬ新しき土を

新しく私にきたれりレクエルド背高き馬よボラーチョに届く

立ち枯れの青紫蘇の種子を集めたり三代目にて香の淡くとも

アマリアの高き鼻筋を描きゆく日本の顔は描き慣れぬまま

枝のあるかたち整えてコーヒーは土より立てりひと鉢の土に

思いつつスケッチなどもせぬ儘にブーゲンビリアの花過ぎゆきぬ

ぬかるみは滑りやすしと幼子は知りてイースターの休日終る

わが居間に虎の面一つ増えたるを気付かぬ人もうらやむ人も

アトリエの小さき隅にうずくまり足を描きおり骨格おもいて

湿度ある地下のアトリエに通いゆくプラタナスの落葉散りしく道を

わが心に熱く燃えろと選びたるパスキスタンの布を着ての一日

コルドバの径(みち)の堇の根づくらしわが八階の隅の日だまり

前をゆく馬上のリカルドに枯葉散りポプラ透かして高き空見ゆ

一日に幾度も歩みとめて見るアルゼンチンの高き蒼空

八階の私のベランダに置く木草自然淘汰はわが眼にも見ゆ

常に持つバッグの中の手鏡はあかるき紅(あか)の京鹿の子

日本とアルゼンチンとを棲み別けて仰々しきことは嫌いになりぬ

はかなげに花を浮かべてジャスミンのお茶を飲まむとする夜の時

合わせたる葉を少しずつ拡げゆく動きまだありコーヒーの木に

アマゾンの樹海の一枝削られてわがスープ飲む匙となりたり

まだ行かぬアマゾン深きインディオの作れる匙も布も私の居間に

巨きさの理解出来ざる幼子を連れて恐竜の尻尾のあたり

わが姿化石となるはいつの日か巨き大腿骨の風化も止みて

あまりにも古き世のもの並ぶなか獣の糞(ふん)の化石をよろこぶ

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一五〇-〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三-四五-三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ　090-8434-8646
TEL　03-6765-5838
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　imayurizm@gmail.com

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。

◇会費制は廃止。

◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。

◇令和六年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。

◇編集・発行　今泉由利